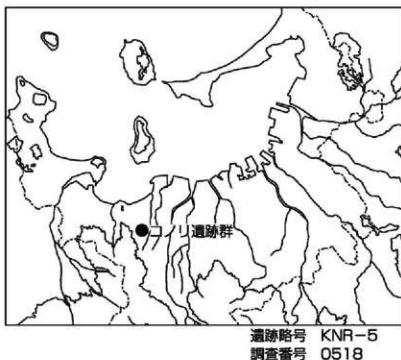


コノリ遺跡群 3

—第5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第930集



2007

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、当教育委員会では学校教育のさらなる充実をめざし、小中学校など教育施設の拡充をおこなっていますが、そのために一部の遺跡が影響をうけることもあります。当教育委員会ではこれらの遺跡について事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は西区拾六町三丁目に所在する宅敷小学校敷地内におけるコノリ遺跡群第5次調査の成果を報告するものです。この調査により、弥生時代の建物群など当時の集落に関わる遺構を確認することができ、この地域での新たな資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を頂いた関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成17年5月16日から平成17年6月14日にかけて行ったコノリ遺跡群第5次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成、写真撮影、挿図の整図は大塚紀宜が行った。
3. 本書の挿図内で用いた方位は磁北で、真北から6° 21' 西偏する。
4. 本書で使用した遺構の呼称は、溝状遺構をSD、柱穴・ピットをSPと略号化している。
5. 遺構番号は基本的に各々通し番号で、重複はない。
6. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
7. 本書の執筆・編集は大塚が行った。

目　　次

第1章　はじめに	1
第2章　周辺の歴史的環境	2
第3章　調査の記録	4
第4章　小結	7

遺跡調査番号	0518		遺跡番号	KNR-5	
地番	西区拾六町3丁目21-1		分布地図記号	橋本 91	
開発面積	110.4m ²	調査対象面積	110.4m ²	調査面積	110.4m ²
調査期間	2005(平成17)年5月16日～6月14日				

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2005年（平成17年）2月8日付け施設第1549号文書で、福岡市教育委員会施設課より福岡市西区拾六町三丁目21-1地内、すなわち福岡市立壱岐小学校敷地内における校舎増築にともなう埋蔵文化財の事前審査についての依頼文書が提出された。これをうけて埋蔵文化財課（当時）では、申請地が周知の遺跡であるコノリ遺跡群の範囲内に位置することから、同年3月9日に現地の試掘調査を実施した。その結果、現地表下50cmで遺構を検出し、対象地内に遺跡が存在することを確認した。

この試掘調査の結果をうけて埋蔵文化財課では関係部署と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることから、建物建設によって影響を受ける範囲について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成18年5月から6月にかけて発掘調査を実施した。

調査はまず対象範囲の表土を除去して遺構面を検出し、遺構を掘削する手順で進められた。調査は5月16日より重機による表土除去から開始し、作業員による遺構検出・遺構掘削、遺構測量図の作成、写真撮影を行い、6月14日に調査を終了した。

発掘調査の実施にあたっては、当教育委員会施設課、並びに壱岐小学校の先生・ご父兄の方々をはじめ関係者の方々に多大なご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝いたします。

また、発掘中に遺跡の説明を熱心に聞き、郷土の歴史や考古学という学問について興味を持ってくれた壱岐小学校の生徒のみなさんに対し、心より感謝と敬意を表します。

2. 発掘調査の組織

事業主体 福岡市教育委員会

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第1課）課長 山口 譲治

庶務担当 文化財整備課（現文化財管理課） 鈴木 由喜

事前審査 埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第1課）事前審査係 井上 薫子

調査担当 埋蔵文化財課調査第2係 大塚 紀宜

調査作業 石川洋子 伊藤美伸 乾 俊夫 桑原美津子 柴田 博 田中トミ子

鍋山治子 濱地静子 林 厚子 播磨千恵子 吹春憲治 北條こず江

水野由美子

整理作業 篠原明美 古城恭子

第2章 周辺の歴史的環境

1. 自然地形と遺跡立地

早良平野の西を区画する山塊は北から長垂山、飯盛山などを形成しながら南に延び、背振山系に合流する。その山塊を北西から南東方向に遮断する谷が数本あり、そのうちいくつかは古代からの峠道となっている。具体的には、飯盛山の南を抜けて、糸島平野南東端に下りる「日向峠（ひなとうげ）」と、今回の調査地点の南側を通て広石古墳群を抜け、錦崎古墳群を横目に見ながら今宿平野に達する、通称「広石峠（ひろいとうげ）」があげられる。今回の調査地点に近い広石峠は、「額田駅」推定地と隣接することもあり、律令期の官道として利用されていた可能性が高いと考えられる。

この山塊の東麓にコノリ遺跡群が立地している。遺跡群の西側には山際に沿って十郎川が流れ、その東側は室見川まで標高10m以下の沖積平野が広がっている。現況では標高10~20mに及ぶ斜面の広い範囲が遺跡の範囲となっている。

2. 周辺の遺跡概観

今回の調査地点周辺の遺跡を概観すると、特に目を引くのが、古墳時代から奈良・平安期の遺跡や同時期の製鉄遺跡が多いことである。

弥生時代の遺跡として、周辺では拾六町ツイジ遺跡（「拾六町ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第92集 1983）や橋本一丁田遺跡（「橋本一丁田遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告第816集 2004、他）、牟多田遺跡（「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第27集 1974）などが調査・報告されている。いずれも、水田耕作に関連する低湿地を包含する遺跡で、弥生時代の中前期以降、室見川西岸の平野部ではかなりの範囲で水田開発が行われていたことを物語っている。

弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡として、コノリ遺跡群の北側に位置する宮の前遺跡（「宮の前遺跡（A~D地点）」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971、他）や湯納遺跡（「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集」福岡県教育委員会 1973、他）などの、平野から一段上がった高台上の集落・墳墓遺跡が上げられる。宮の前遺跡では弥生時代終末～古墳時代前半の竪穴住居跡、弥生時代末～古墳時代初頭の墳丘墓や石棺墓が出土し、土器製作工房の存在を示唆する工具も出土している。湯納遺跡は宮の前遺跡と細い谷を挟んで対面し、ほぼ同時期の集落が形成されている。早良平野全体で見ても、この時期の拾六町地区の遺跡の充実度は目を見張るものがある。

古墳時代には野方中原遺跡、野方久保遺跡など、コノリ遺跡の南側地区で大規模な集落が出現する。野方中原遺跡は弥生後期から古墳時代にかけての大規模な集落と墓地で構成され、古墳時代に属する住居数は100軒を超える。また広石古墳群や羽根戸古墳群などの群集墳が飯盛山から叶岳の東麓一帯に築造される。

古代では、倭名類聚抄に記載がある早良六郷のうち額田郷は野方地区に比定されており、また延喜式に記載がある額田駅も野方にあったとする見方が一般的である。これに基づくと当時の官道は野方を通り、広石峠を越えて当時の怡土郡に抜けていたと考えられる。したがって、コノリ遺跡群を含む当時の拾六町地区は駅家に近く、官道に沿った重要な地区であったといえる。

3. コノリ遺跡群の概要とこれまでの調査成果

調査地点周辺の地形は、宅地造成や小学校などの建築に伴って度重なる改変を受けており、現在では実際に現地に立っても自然地形を伺うことは非常に困難である。従って、以後の地形に関する記述

は明治23年に発行された地図に基づいて行うことを了承いただきたい。

現在コノリ遺跡群として遺跡分布地図上に記載されている範囲は、南西から北東に延びる丘陵と、その南北両側の谷部分を含む地区である。遺跡範囲の東側は十郎川を境界とし、西側は谷の端部付近まで含んでいる。現況では、遺跡範囲内の南側の谷は宅地造成による完全に埋没しており、また遺跡範囲の中央にある尾根部分もおそらく相当削平されている。コノリ池から北西に延びる谷は旧地形の状況を残していると考えられ、現況では両側の丘陵との比高差がかなりある深い谷地形を呈している。

今回の調査地点は上述の旧地形によると南側谷部内にあたる。現在の毫岐小学校の敷地範囲が谷部分にはほぼ該当するとみられ、学校敷地北西側の境界線が旧地形の谷部と丘陵部の境界を示していると推定される。

コノリ遺跡群ではこれまで、今回の調査以前に4次の調査を実施している。これまでの調査は、コノリ遺跡群がまだ数カ所の個別の小規模な遺跡に区分されていた頃も含むため、以下の表でこれまでの調査をまとめている。調査内容が未報告の第1次調査を除き、各遺跡の内容は明らかとなっており、繩文、弥生、古代の各時期の構造が確認されている。

Tab. 1 コノリ遺跡群調査一覧

次数	調査地点（調査時）	調査年	調査面積（ha）	調査原因	調査概要	報告書名	報告書番号	刊行年
1次	松六町675番1	1973~74	宅地造成	日本大学に調査委託。調査内容は未報告のため不明。				
2次	松六町786番地	1996	360	公民館改築	ビットリ、墳・墓、奈良時代の籠立柱建物跡。弥生、奈良時代の遺物、鐵浮き土器。	公民館建設関係埋蔵文化財調査報告	162	1997
3次	松六町通地	1998	1500	共同住宅改築	唐、土坑、井戸（15世紀）、ビット（弥生中期後半～）、剣抜頭遺跡標、周区マーカー（8世紀の遺物多い）。落とし穴（礎石）、鐵瓦石斧、尖頭器など出土。	コノリ遺跡——第3次調査——	728	2002
4次	松六町通地	2004	2025	共同住宅建築	旧石器～中世後期までの遺跡、遺物を検出。墓葬は弥生時代中期～終末、古墳時代後期、奈良時代、中世後期の各時代に含まれる。	コノリ遺跡2——コノリ遺跡群第4次調査の報告——	876	2006
5次	松六町3丁目21-1	2005	110.4	校舎増築	今回報告	(今回報告)	930	2007



Fig. 1 調査地点位置図 (1/25,000)

第3章 調査の報告

1. 調査概要

調査対象地は小学校敷地の北側部分に位置する。現況での標高は11m前後である（福岡市下水道局標高による）。北側校舎の東側増築部分、すなわち教室1室分と廊下の範囲および、北側校舎に付設する避難階段部分の2ヶ所を調査範囲として設定した。調査進行および説明の都合上、前者をA区、後者をB区と呼称する。

A区は調査面積93.9m²で、調査区の北半分は昔の校舎の基礎にともなう搅乱が縦横に走り、遺構面の状態も悪く、ピットもほとんど分布しない。南側部分ではピットや溝状遺構が遺存しているが、柱穴列が確認できるものの、建物を構成する柱穴群は確定できない。

B区は調査面積16.5m²。調査範囲内では搅乱を検出したのみで、遺構は存在しない。

2. A区の調査

(1) 遺構面・搅乱

遺構面は現地表直下の-30cm前後の深さで検出した。遺構面の土質は調査区北半が花崗岩未風化土、南半は花崗岩風化バイラン土である。遺構面はほぼ平坦で、学校用地造成の際に一律に削られた可能性が大きい。調査区西側部分は既設の配水管を避けて調査を行ったため、東側部分との間に帯状の空白部分が生じている。調査区内には既存の校舎と平行方向に4本、直交方向に2本の溝状の搅乱が確認できた。校舎に平行方向の搅乱のうち1本は漆喰、煉瓦で作られた暗渠または個溝状の構築物が確認される。搅乱内からはガラス・コンクリート片等の他、墨入れなど昔の小学校で使用されていた文房具などが出土した。搅乱の方向や遺物などから見て、この搅乱は現在の校舎以前の木造校舎の基礎の撤去に際して生じたものと考えられる。

(2) 検出遺構

調査区南側部分を中心に、ピット、溝状遺構を検出している。ピットは計59基、溝状遺構は計3本である。溝状遺構は後述する柱穴列にいずれも平行する。

ピットは調査区の南東側と南西側に集中して出土する。ピットの集中度からみて、この2つの部分にそれぞれ竪穴住居が存在する可能性もあるが、調査範囲外の状況が全く不明であることから断定はできない。

SA-01 (Fig. 4 上)

調査区のはば中央に位置する南北方向の2間3本の柱穴列である。柱間は北から1.7m、1.5mを測る。遺構検出面から柱穴底面までの深さは30~40cmで底面のレベルは各柱穴ではほぼ揃う。柱穴列の北側延長線は搅乱で失われており、北にさらに延びる可能性は残る。南側には該当する柱穴が見あたらないため、南側には延びない。また東西に展開する適切な柱穴も検出されておらず、掘立柱建物を構成する柱穴列かどうかも不明である。

SA-02 (Fig. 4 下)

調査区南東側に位置する南北方向の2間3本の柱穴列である。柱間は北からそれぞれ1.5m、1.5mを測り、ほぼ均等に配列される。遺構検出面から柱穴底面までの深さは25~40cmで、南側の柱穴が若干深く掘られている。柱穴列の北側延長線上には該当する柱穴がなく、北側に柱穴列が延びる可能性はない。南側は調査区外に及ぶため、南側に柱穴列がさらに延びる可能性はある。柱穴列の両側に掘立柱建物を構成するような柱穴の展開はみられず、建物を構成するかどうかは不明である。

(3) 出土遺物

各遺構から出土した遺物は小片が多く、図示できるものはほとんどない。破片の状況から見て弥生土器の破片とみられるものが多く、また土師器とみられるきめの細かく薄手の破片がほとんどみられず、須恵器の破片は全くみられないことから、遺物の大半は弥生時代に属するとみられる。したがって、検出された遺構も弥生時代のもの可能性が高い。

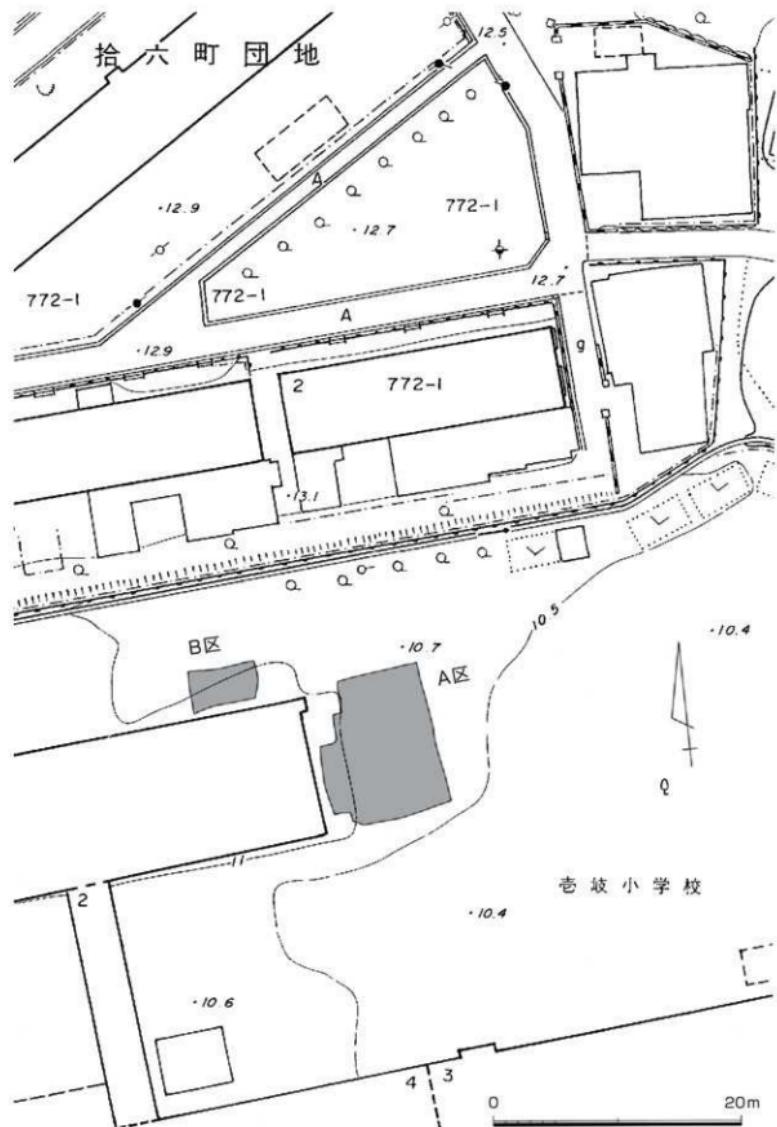


Fig. 2 調査区配置図 (1/400)

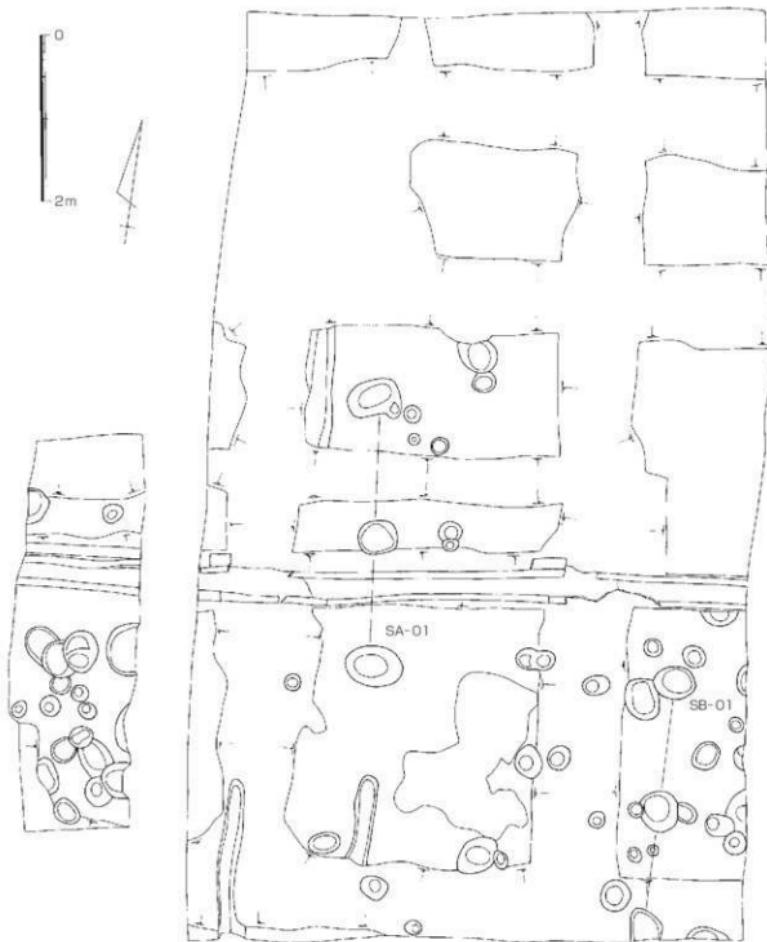


Fig. 3 A区全体図 (1/60)

第4章 小結

今回の調査では調査した範囲が狭く、また調査対象地内が学校用地造成の際に大きく削平を受けているとみられ、検出した遺構の状態も余り良好ではない。また出土した遺物も総量でパンケース1箱相当に過ぎず、その中で時期が明確な遺物はほとんど無い。従って、今回の調査のみで具体的な歴史像を語るのは困難ではあるが、これまでの調査結果や周囲の旧地形を参考に推測できる範囲で今回検出された遺構がどのように位置づけられるのか述べたい。

これまでのコノリ遺跡群の調査は小学校北側に延びる丘陵上とその北側斜面部分で行われており、丘陵北側では奈良時代の製鉄遺構が検出されているが、今回の調査では奈良時代の遺物は出土していない。奈良時代の施設はこの部分には及んでいなかったことが推定される。また尾根上の第4次調査では弥生時代中期～終末の集落が確認されている。この4次調査地点の南麓の谷部分にあたる今回の調査地点周辺、すなわち壱岐小学校敷地一帯にも弥生時代の集落が広がっていた可能性は高いと考えられる。

十郎川西側の丘陵上には弥生時代～古墳時代にかけての集落が随所に見られ、壱岐小学校の敷地の下にもそのような未知の集落が眠っているのではないか。そのような期待を抱かせる今回の調査結果である。

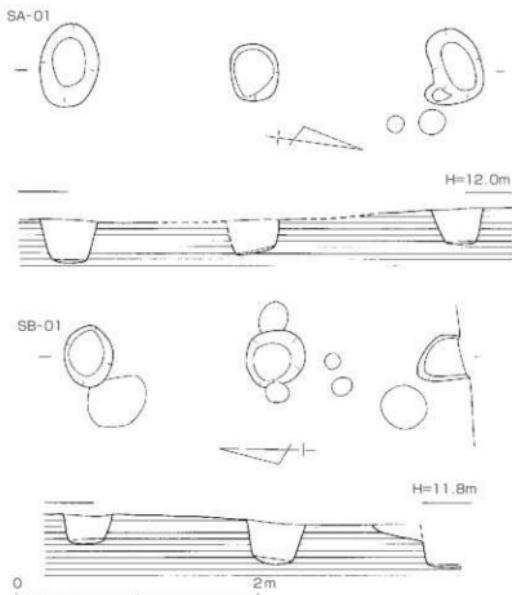


Fig. 4 SA-01・02遺構実側図 (1/40)



Ph. 1 調査地点全景 (東から)



Ph. 2 A区全景（北から）



Ph. 3 A区南側柱穴群（西から）



Ph. 4 B区全景（東から）

報告書抄録

ふりがな	このりいせきぐん3						
書名	コノリ遺跡群3						
圖書名	第5次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第930集						
編著者名	大槻紀宣						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	平成19年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	
	市町村	遺跡番号					
このりいせきぐん コノリ遺跡群	ふくおか市西区拾六町 3丁目21-1	40130	02831	33°33'51"	130°18'31"	20050516 ↓ 20050614	110.4m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
小学校校舎増築	集落	弥生	ピット・溝	弥生土器			
<p>調査地点は壱岐小学校敷地内である。調査地点周囲の旧地形は、拾六町団地が位置する丘陵が東へ傾斜していって十郎川に面する段丘の先端部である。敷地内は学校校地造成の際にかなり削られていたと推定される。</p> <p>調査範囲は教室1教室分と廊下部分の、かなり狭い範囲に限られる。北側の隣接地は学校敷地から2~3m高く、調査前から学校敷地内が相当地下げされている懸念があった。表土を除去したところ、やはりかなりの削平を受けており、表土直下でバイラン土および未風化花崗岩が露出したが、その面で柱穴を主体とする遺構群を検出できた。ただし遺構面の遺存状況は悪く、明治~大正時代に建築されたとみられる旧校舎の基礎が縱横に走っている。その他の柱穴や土坑は、覆土は硬質の黒褐色粘土を主体とする覆土である。</p> <p>柱穴のうちいくつかは東西または南北に列をなすものがあり、建物の一部と考えられる。柱穴直径からみて、小型の建物と推定される。</p> <p>柱穴や土坑からは弥生時代の土器破片が出土している。また明治~大正の校舎にともなう時代に使用された遺物も出土している。</p> <p>以上の調査から、弥生時代の集落跡が存在したと考えられる。調査範囲が狭く、また削平も著しいために具体的な建物は確定できないが、掘立柱建物が存在した可能性が高い。</p>							

コノリ遺跡群3

- 第5次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第930集

2007年(平成19年)3月30日

発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1-8-1)

印刷 株式会社博多印刷

(福岡市博多区須崎町8-5)